



教育開発推進機構 NEWSLETTER

# 教育開発ニュース

VOL. 19  
NEWSLETTER

KOKUGAKUIN University 平成31年(2019)2月28日

## 目次

- いろいろな学び —ノートテイクの世界—..... p.2
- 教育開発推進機構講演会  
「旅で身につけたコミュニケーション～考古学からジャーナリストへ～」..... p.8
- シリーズ「大学授業最前線—教員の努力！学生のまなざし！（19）—」 ..... p.9  
川田裕樹（人間開発学部准教授）
- データは語る（4）  
—教育開発推進機構とFDのこれまでとこれから— ..... p.12
- 名著探訪 —高等教育、この1冊（第11回）—..... p.14
- 教育開発推進機構彙報..... p.15
- そったくどうじ 啐啄同時 —編集後記—..... p.16

# いろいろな 学び

## —ノートテイクの世界—

國學院大學では、パソコンノートテイク（2人1組で行うパソコンの文字入力を利用した文字通訳。以下、ノートテイク、テイクと表記）による情報保障の支援を行っています。昨年12月1日に、本学のノートテイクの養成に携わってくださっている宇都野康子先生とテイクの学生たちがノートテイクフェアを開催しました。

### ノートテイクフェア・プログラム

- 「五目ごはん ～私たちの生きる道～」  
（今村彩子監督：2012年）鑑賞
- パネルディスカッション
- ノートテイク体験会

パネルディスカッションでは、テイクとノートテイクを利用する学生とがノートテイクや講義保障について、今考えていることを分かち合いました。どんなことが語られたのでしょうか——。ノートテイクに関わる学生たちの想いを読者の皆さんにお届けします。

#### 司会：

本日はお集まりいただき、ありがとうございます。國

學院大學の学修支援センターでは、聴覚障がいをもつ学生の支援に、ノートテイクとして学生に入ってもらっています。

今回は、宇都野先生を中心にテイクの学生の皆さんと支援を受けている学生から話を聞き、テイクの支援者としての役割だけではなく、活動を通しての気付きや意義などをお互いに話合える場にしたいと思います。

#### 宇都野先生：

こんにちは。こちらでノートテイクの養成に携わっています。私は社会人になってから仕事としてノートテイクを始めましたので、その分、自分で色々練習方法を見つけながらやってきました。その時の試行錯誤を皆さんにアドバイスできたらいいなと思い、講師を続けています。今日はよろしくお願いします。さて、映画はいかがでしたでしょうか？

#### 泉さん（ノートテイク）：

僕自身、手話は知っていましたが、テイクや情報保障は大学に入学して初めて知りました。大学は知らないも



のと出会える場なわけですが、先ほどの映画を観て、久しぶりに知らなかった世界に出会った気がしました。

テイカーとしてコメントすると、國學院大學は情報保障の手段として手話も音声通訳ありません。ですが、技術だけが問題なのではなくて、「テイカー」、「情報保障を受ける人」、「先生」との三位一体の関係性があるって初めて大学での情報保障というものが生きてくると映画を観て感じました。

#### 矢島さん（ノートテイカー）：

私はテイクを始めて1年も経たない初心者です。テイクを始めてから、不自由を感じる人たちに対する理解を深めていかななくてはと感じています。授業の内容はテイクで伝わるかもしれないけれど、「その服かわいいね」みたいなプライベートの会話が上手く伝わらなくて、もどかしいなと毎回感じています。映画の中で、ノートテイクだけでは情報保障が十分ではないという話がありました。利用者が実際にはどう感じているのかが分かって、自分からテイカーという枠に満足しないで、手話などを積極的に学んでいかなければいけないと感じました。

#### 小池さん（ノートテイカー）：

映画の中の、「伝わる環境があれば聴覚障がい者の可能性が広がる」という言葉が印象に残りました。情報保障があれば、聴覚障がい者の方ができることや目指せる夢が広がる。そういうことに対するお手伝いを自分たちがやっているんだと感じて、もっと自分にできることを

考えないといけないと思いました。

#### 田淵さん（ノートテイカー）：

他の大学の取り組みを見て、考えさせられました。自分自身、テイクで打ち間違っても、授業がどんどん進むので、諦めて打ち直さずに進めてしまうこともあります。「きっときちんと伝えられていないな」、「自分でやり切れていないな」と思います。もっと練習を頑張りたいと思いました。それから、私は人と話すことが苦手で、なかなか清水さん（ノートテイク利用学生）に話しかけられません。もっと授業の面でもサポートしたいし、仲良くなりたいと思っています。

#### 宇都野先生：

今の映画は皆さんを非難するための内容ではないので、必要以上に落ち込まないでくださいね。では、映画に出てきた人たちと同じ聴覚障がいがある人の立場で、ノートテイクを利用している清水さんから感想をお願いします。

#### 清水さん（利用学生）：

國學院大學でノートテイクの情報保障の支援を受けています。私の場合はノートテイクをつけてもらって講義を受けていますが、映画を観ていて、手話通訳があると便利な面が多いと思いました。けれど、私の個人的な好みではテイクの方がいいです。手話だとずっと手話通訳者から目が離せず、ノートが取れないので、ノートテイク

## 五目ごはん ～私たちの生きる道～

今回のノートテイクフェアで鑑賞した「五目ごはん～私たちの生きる道～」では、今村彩子監督が2006年に発表した「ユニバーシティライフ～ろう・難聴学生の素顔～」に出演した5人の卒業生のその後が描かれます。ろう学校の教諭になった人、会社員として働く人、聴覚障害者協会子どもたちのサポートをする人、主婦となり母になった人、大学で障がい学生支援のマネジメントに励む人——。かつて大学で情報保障を受けた学生たちが社会のなかでそれぞれの人生を歩む姿は、現在の共生社会の在り方を示してくれています。

「五目ごはん」の最後におまけとして付けられている「ユニバーシティライフ」のハイライト版では、彼らが大学でどのような情報保障を受けたのか、自分たちに合った情報保障をどのように獲得していったのかが、彼らの学生生活を通して収められています。ろう・難聴学生への支援体制も人数も、各大学によってそれぞれ違いがあり、アフターマティブ・アクションを実施する大学、ノートテイカーを自分で探さなければならない大学、手話通訳者を付ける大学など多様な大学の姿が描かれています。

クの方が好きです。

映画に出てきた四国の大学のように、ノートテイクの利用者が多いのは羨ましいと思いました。國學院では、学部は私だけなので…。話し相手がたくさんいていいなと思います。

テイクについては、小学校の時から、家族の協力を得て簡単なテイクを付けてもらっていました。小学校の授業は板書が中心でしたし、授業の内容も分かりやすかったのですが、大学の先生はあまり板書しないとか、ずっと話してばかりという話を聞いていたので不安でした。大学入学前は、全部の授業にテイクがつけられないかもしれないという話でしたが、たくさんのノートテイクに参加してもらって、全部の授業に入ってもらえてありがたかったです。私にとってはテイクが情報の全てなので、頼りにしています。それに、テイクの皆さんが私の聞こえない不安を分かってくれているので、授業前に、伝わりやすく話しかけてくれて楽しく過ごせています。先生が講義に来るのが遅い時は「まだかな〜」とか。会話をするのが楽しいです。

#### 宇都野先生：

授業のテイクだけが支援じゃないみたいですね。仲良くなりたかって気持ち、支援したかって気持ちがあるからかな。それでは、支援をしたいと思ったきっかけにつ

いて、上級生にお話を聞きます。

## 自分だけではできないこと

#### 窪田さん（ノートテイク）：

テイクを始めたきっかけは、元々教員になりたくて大学に入り教職課程を取っていた時に、大学の先生から「これからの学校教育には障がい者支援の考え方が必要だ」とノートテイクを勧められたことです。少しでも自分の力になればと思い、参加したわけですが、「どうしてもパソコンのタイピングが追いつかない」、「このままでいいのか」といろんな不安に駆られました。その時一番力になったのが、「清水さんのために」、「情報保障するために頑張ろう」という気持ちです。誰かのために何かをするというパワーを感じました。自分ひとりではこのパワーは出なかったと思います。タイピングのスピードが自然と速くなっていったり、授業以外の雑談も面白いからテイクに入れようといった配慮が少しずつできるようになったりしたのは、自分のためだけではできなかったと思います。この気持ちはテイクに入ったからこそ培われたことだと思います。

#### 池田さん（ノートテイク）：

最初に清水さんのことを知ったのは入学した時です。



同じ学科の学生に向けて自己紹介をしてくれて、その時に清水さんのことも、障がいのことも、ノートテイクという学修支援があることも知りました。手話サークルに入って、実際に本人と関わって、友人にもなって…。それでテイクを思い出して、友人として清水さんを助けたいと思ったのがきっかけです。

テイクを始めた当初は、どうしてもタイピング技術が劣って情報が伝えられないことを痛感しました。テイクはペアを組むので、ペアの先輩に比べて自分の伝えられる情報が少なく、伝えられていないなと感じたり、自分の担当の時に限って大事な情報が次々と出てきて、伝えようと思っても追いつかない時がありました。どうしようと思いましたが、最近はタイピングの正確性や技術が上がって、以前より情報が伝わっているのは嬉しいです。自分のためにもなり、清水さんのためにもなっているのでやってよかったと思います。

## 新人テイカーの不安

### 長谷川さん（ノートテイカー）：

まだノートテイクを始めたばかりで、不安が大きいです。一緒にテイクしている先輩方に「またよろしく」と言ってもらったり、こういう時はこうするとか、テイクをする上でのアドバイスをしてもらったり、連携が上手くいったりという経験が少しずつ増えていると感じるので、これが一番の励みです。

### 小宮さん（ノートテイカー）：

テイクに入らない週もあれば、週2回くらい入る時もあります。テイクをしていると、本当に、学ぶことだらけです。今でもテイクに入るときは上手くできるか、毎回、不安になりますが、先輩たちのテイクを参考にしながらやっています。

### 宇都野先生：

では、続いて、清水さんにとって情報とはどういうものなのでしょうか。今、テイカーからは情報を十分に伝えられていないという反省の弁が出ましたが、清水さんはどう思っていますか？

## 情報は目でみるもの

### 清水さん：

私にとって情報は目で見るものというイメージ、そういう意識があります。聞こえる音はぼやけた音です。例えば、放送内容は音がゆがんだ感じで聞こえてくるので内容が分かりません。だから、情報は目で見るものという意識があります。

私は高校の時はろう学校に通っていたので、その間は、情報は全て目で見るものに変換されている状態で、見るもの全てが情報でした。今は、小学校の時以来の、聞こえる人と一緒に学ぶ環境なので、音はあんまり頼りになりません。例えるなら、音としての情報は全体の一割いかにないくらいで、後は全て見るものという感じです。

### 宇都野先生：

それでは、ほとんどない例だとは思いますが、例えば、教室の中で窓を開けていたら、「教室に蝉が入ってきた」という例ですが、この場合はみんながざわざわします。でも、授業には関係が無い。そういう情報は必要ですか？

### 清水さん：

蝉の音は高いので聞き取れませんが、周りの人たちが上を見たりするので、なんだろう？と気になります。情報があつた方が「だから上を見ているのか」と分かるので嬉しいです。

### 宇都野先生：

講義保障は、授業に関係のあることだけではなく、教室の中で起こっていること全てということですね。例えば、清水さんではなくて、他の学生が先生から怒られている時に、「清水さんに関係ないからいいや」ではなく、「先生がある学生を怒っている」と清水さんに伝えると、「ああ先生は怒っているからあの表情なのだ」と分かります。文字で確認して、表情を見ると一致しますよね。こういう情報を伝えられるようになるといいと思います。

また清水さんに質問です。さっき、何人かが清水さんとコミュニケーション取りたいけど上手くいかないと言っていました。どういう風にコミュニケーション取ればいいですか？手話ができない時はどうしたらいいです

か？アドバイスしてください。

**清水さん：**

一番スムーズに伝わりやすいのは、筆談やスマホに文字を打って見せてもらうことですが、手もとに物が無い時は、手に書いたり、空に書いたりしても話せるので、見て分かる情報があると助かります。口話は、話せても読み取りが下手なので繰り返し聞くことになってしまいます。なので、道具があれば、筆談や目で見えるものが良いです。

## 情報保障とは参加を保障すること

**宇都野先生：**

ありがとうございます。

口の動きにプラスして、何かを加えて書くといいですね。スマホやiPadなど、色々な方法を検討してください。先ほど、清水さんから情報は目で見えるものだと話がありました。映画にもあったように、情報を取得することが参加につながります。音の情報が可視化されることで、その場の参加が保障されるわけです。映画の中で、授業の内容だけでなく、先生の冗談が分かるので、みんなと同じように笑えるのが嬉しいとありましたね。これはとても印象に残りました。リアルタイムで情報が伝わるこ

とが参加を保障することでもあるのだと思います。記録を後から伝える議事録ではなくて、今この場で話されていること、これを文字で見ることに参加していることになります。これこそ情報保障の肝なんです。

## 失敗を乗り越えるために

**宇都野先生：**

さて、最後に、テイカーを辞めたいと思ったり、もうできないと思って落ち込んだエピソードがあれば聞きたいです。そこからどうやって立ち直ったのか、継続の原動力を聞きたいです。

**角川さん（ノートテイカー）：**

私がテイクに入っていて一番大変だと思ったのは、普段自分がテイクに入っていない授業に、テイカーが遅刻するというで30分だけ代行として初めて入った時のことです。専門用語だらけの授業で、私は他学部なので、本当に困ってしまいました。登場人物もたくさん出てきました。しかもその時の先生は話し方が特徴的で、速かったんです。この時の代行の30分は冷や汗しかかきませんでした。一番大変だったのはその時です。ペアの人にフォローしてもらって何とか頑張りました。

大変な時はありますが、辞めたいと思ったことはない



です。大変だと思っても、来週のシフトはあるし、自分が辞めたらそこを誰かに代行を頼まないといけないし、自分がやりたいと思って始めたことなので。始めたことを辞めたいと思えない性格なので、この授業は終わっちゃうけど、次の授業ではうまくタイピングできるように頑張ろうと思って切り替えながらやっています。

### 田山さん（ノートテイカー）：

3年前期の6月からテイクに入っています。辞めたいと思ったことはないですが、大変なことはたくさんあります。初めてのテイクの時に思ったのは、「90分の授業ってこんなに情報量があるんだな」ということです。自分が授業を受けている時は、聞き流しているのだと思います。それを全部文字にすると、「授業を聞くのはこんなに疲れるのか」と思いました。自分の受けている授業の90分とテイクの90分があまりに違っていて、これが最初のギャップでした。

私は清水さんより学年が上で、学部は同じです。だから、授業の内容は基本的にほとんど分かります。でも、私だけ分かっているかもしれないと思います。それは悩みました。私が納得しても仕方ない。テイクに入った授業が、自分にとっては自分の授業の応用だったり反復だったりする部分だから勉強になって楽しいのだけど、私だけが楽しむものではないと思います。それに、自分が4年になると、全休の日にテイクのために大学に行かなきゃいけないのは、正直、面倒な時があります。学年のことで言えば、テイクに入った段階で学年は下だけどテイカーとしては先輩のテイカーさんたちのテイクが上手くて焦りました。学年だけ上だけど、超初心者みたいな状態だったので、そこは焦りましたが、辞めたいとは思わずに来ていますので、卒業までテイクに入ると思います。

## 関わりの中で育まれるもの

### 宇都野先生：

ありがとうございます。

二人の話は「責任感」というキーワードでまとめられると思います。他のテイカーや清水さんとの関わりで責任感がより強くなった部分があると思います。だから、

責任感が強くないとテイクはできないというわけではなく、むしろ、テイクの実践のなかで責任感が培われていくのかなと聞いていて思いました。

二人とも、それぞれの授業で大変だと思ったことがあったようですが、上手く切り替えができていたと感じました。終わったことを悔やんでも仕方がない。何かの糧にして来週に繋げていくことを15回続けると、大きな財産になるかと思います。パソコンを入力するスキル以外にも、責任感や支援の関りのなかから学ぶものがあると思います。これを大事にしてやってほしいです。

ノートテイクは職員や先生、一緒にテイクを頑張っている先輩、一緒に始めた同期、清水さんと一緒に作り上げるものです。この共同作業を学生のうちに体験してほしいです。これはみんながテイクから離れて社会に出ても生きてきます。

社会性を身につけられるノートテイクをみんなにやってほしいという言葉でパネルディスカッションを締めくくりたいと思います。ご意見頂いたテイカーのみんな、かわるがわるテイクをしてくれた皆さんありがとうございました。（一同拍手）

### 〈編集後記〉

今回のパネルディスカッションを通して、それぞれの気持ちを共有することができました。この経験を生かして、今後のノートテイクを実践していきたいと思います。

今、國學院大学のノートテイカーの数は十分とは言えません。情報保障の支援体制も十分とは言えません。学内の情報保障への理解も人によって様々です。大学にはいろいろな学びがあり、いろいろなコミュニケーションの仕方があることを広くお伝えできるよう、教育開発推進機構では励んでまいりたいと思います。

読者の皆さんのなかで、大学生の間に、新しいことにチャレンジしてみたいと思っている人がいたら、ぜひ一緒に活動をしましょう。

# 教育開発推進機構講演会

## 旅で身につけたコミュニケーション

～考古学からジャーナリストへ～（講師：丸山ゴンザレス氏）



ここ数年、グローバル化と言われる一方で、学生の内向き志向に懸念が示されています。教育開発推進機構では、海外取材経験の豊富なジャーナリストの丸山ゴンザレス氏（109期文学部史学科卒業、111期文学研究科史学専攻修了）を講師にお迎えして、講演会を行いました。終わったばかりの取材の内容に触れながら、現地でのコミュニケーションを中心にお話しくださり、会場からの質問も多く、有意義な時間となりました。今回はその内容の一部をご紹介します。（まとめ：佐川）

**【主催】** 教育開発推進機構ランゲージ・ラーニングセンター（LLC）

**【日時】** 平成30年11月17日（土）14:30～16:30

**【会場】** 國學院大學渋谷キャンパス120周年記念1号館1階1105教室

### ●大学、大学院で学んだこと

自分の素質は國學院に在学した6年間に作られたと思っています。専攻したのは考古学ですが、例えば遺跡の発掘では中途半端なことはできず、次に来る後輩たちが状況を理解できるようにしておく、ということを厳しく指導されました。また、興味の柱を複数立てておき、その間を行ったり来たりすることを教わりました。ジャーナリストという仕事でも、今まで培ってきた事柄をもって考えることができています。

### ●海外でのコミュニケーション

テレビ番組の取材では、現地の人との間に通訳をはさむこともあります。直接英語で話す方が早いのですが、通訳がいると間（ま）が生まれるという利点もあります。コミュニケーションには考える間が必要ですが、通訳はこの間を埋めてくれます。どこの国、どんな文化でも沈黙はいやがりません。



▲丸山氏と質問者

ウガンダとケニアが領地だと主張している島での取材中、ウガンダの警察に尋問される事態に陥りました。通訳の同席は拒否されて、一人に対峙したのですが、その際に重要だったのは相手の質問の意図を考え、場を読んで切り返すということです。仮説を立てて検証することは考古学の基礎ですが、それがこの場でも活かされ、強制送還されることなく取材ができました。

私の英語は、副詞や形容詞は少なく、短い言葉でやりとりし、質問を重ねていきます。言葉というものは修飾語が多いのですが、それを外せば理解しやすくなります。頭のいい人は相手に合わせて話してくれるので、コミュニケーションをとる相手を選ぶことが大事です。ものすごく頭のいい人か、自分と噛み合う人を選びます。誰とでもコミュニケーションできるわけではないということです。

どこの国でも用いるコミュニケーション術ですが、相手との架け橋を探ります。自分との共通項やキーワードを探し、相手に喋ってもらうようにします。質問の中身にも気をつけ、文脈を外さないようにします。質問を鍛えるには、質問を繰り返して理解していくしかありません。

英語を使っても、通訳を介しても嘘はわかります。また、言葉以外に表れるものがあります。例えば、下ネタを話している男性はどこの国でも同じ表情です（笑）。

### ●海外での食事

会話以外に大事にしていることは、食事です。出されたものは何でも食べます。それは、相手に自分の誠意を見せることになるからです。どこの国でも食べ物をぞんざいに扱うのは悪人です。

### ●海外に行くタイミング

英語を勉強してから留学に行きたいという人もいますが、勉強には終わりがありません。知らないということを知覚することによって、学ぶ意欲が出てきます。できないことを知るために海外に行くのです。いじけていても世界は動いているので、若いうちに何かした方がいいです。

# 大学授業最前線

— 教員の努力！ 学生のまなざし！（19） —



「大学授業最前線」は、國學院大學で工夫を凝らした授業を行っている先生方に、その努力と工夫について語っていただくコーナーです。今回は、人間開発学部の川田裕樹先生に、実技を取り入れた講義型授業の取り組みをご紹介します。なお、文中の写真は『原始的ボールゲーム』の実施風景ではなく、受講生による模擬授業（タグラグビー）の様子です。

## 教員の授業努力



「初等科教育法（体育）」における概念・固定観念崩しの試み

川田 裕樹

（人間開発学部准教授）

体育は他の科目とは異なり、教科書がない。また、学習指導要領を読んでも、教科の目標が「…豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を次のとおり育成することを…」などと難しく書かれており、読んだだけ

ではまいち本質を理解できない。そのため、「（学校教育としての）体育とは何か」といったことを理解することは、簡単なようで実は極めて難しい。

「初等科教育法（体育）」は、基本的には講義科目（座学）ではあるものの、体育という科目の性質上、受講生自身が身体を動かすことによって実感することを大切にしたいと考え、「講義内容の理解を深めるための実技」という位置づけで、4回ほど実技形式の授業を行っている。

本稿では実践例として、その実技授業の1つについて、内容および学生の様子の一部を紹介したい。

## 実技授業のテーマ：再考・ルールとは

私達はスポーツをするとき、決められたルールに従っ

たり、あるいはルールをちょっと変えて工夫してみたりする。また、ゲームの中では作戦を練ったりもする。そこで、「ルール」や「工夫」とは何かを考えることを目的に、『原始的ボールゲーム』を教材にした授業を行った。

本稿のみからはイメージしにくいかもしれないが、この単純なゲームからどのようなことが起こる(起こった)のか、授業風景を想像しながらご一読いただきたい。

### 『原始的ボールゲーム』のルール

- ① 1試合90秒
- ② 1チーム3名(両チーム3名ずつ)のゲーム
- ③ 敵陣のカラーコーンにソフトバレーボールを当てたら1点

\*ルールは上記の3つのみであり、90秒経過したらゲームを終了。別のチームがまた90秒間のゲームを行う。これを何度も繰り返し、受講生は交替で参加しながら、この攻守混合型ゲームを楽しむ。

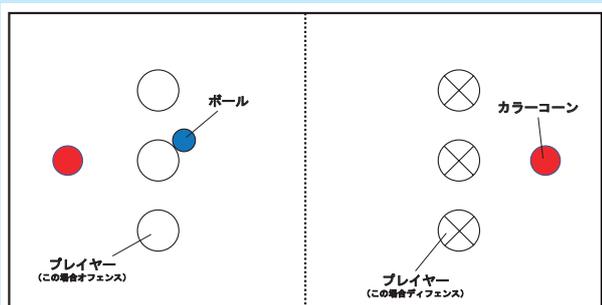


図. 『原始型ボールゲーム』の概要

注) この図では便宜的にサイドライン、エンドライン、センターラインを引いているが、実際にはこれらの線はなく、きちんと定められたコートもない状態でゲームを行う。

ゲームを開始すると、受講生はこのような「ルールがほとんどないボールゲーム」をプレイしたことがないため、攻撃側のプレイヤー(オフェンス)は戸惑いながらもボールを持って敵陣へゆっくりと走り、とりあえずカラーコーンにボールを当ててみようとする。当然、守備側のプレイヤー(ディフェンス)は得点されたくないため、やはり戸惑いながらも3人でカラーコーンを囲んで

守ってみようとする。そのような数十秒間の戸惑いが見られた後、両者とも慣れてきたのか、オフェンスは得点を取るためにやがてパスを回したり、連携しながらディフェンスの隙間を狙ってシュートしたりするようになる。こんな単純なゲームでも(単純だからなのか?)けっこう盛り上がるもので、だんだんと絶妙なパスカットからのカウンター攻撃やフェイント、あるいは(必要がないのに)ドリブルをなどの動きが立ち現れるようになり、夢中になって攻防を楽しむような様子が見られるようになってくる。

このような攻防を繰り返していると、やがて誰かがあふ事に気づく。「カラーコーンを持ってはいけないというルールはないのだから、カラーコーンにしがみついても守ればいいんだ」「カラーコーンにボールを当てられなければ得点を取られないのだから、カラーコーンを持って走って逃げればいいんだ」「相手にしがみついてもいけないというルールはないのだから、ボールを持っているプレイヤーを捕まえてシュートを打てないようにすればいいんだ」といったことである。そして、このあたりからゲームはどんどん無法地帯化する(もちろん大学生なので怪我や事故が起こらないように自分達で配慮しつつ、この破茶滅茶な状態を笑い合いながら「キャッキャ」と楽しんでいる)。

このような無法地帯状態のボールゲームを一通り味わった後、一度受講生を全員集めて、次のように指示を出す。

「原始的ボールゲームをプレイしてみて出てきた不都



合・問題点をグループで出し合い、それを改善するためのルールを作ってみましょう」

グループディスカッションを終えると、グループごとに異なったゲームができあがる。新たにできあがった、新ルールの原始型ボールゲーム（改変版）を何試合か楽しんで、この時間の実技授業を終える。

この実技授業の翌週以降、講義では「ルールとは何か」「ルールとは誰のためにあるのか」「意味もわからず決められた（公式）ルールに従ってプレイするだけで、スポーツを学んだと言えるのか」「スポーツ文化とは何か」「ルールや戦術を工夫する背景に存在するものは何か」などといったことをポイントに、『原始的ボールゲーム』の実技授業を通しての「感じ」や「気づき」を手がかりとして授業を進めていく。

今回取り上げた授業例も含めて、「初等科教育法（体育）」の授業を通して最も重視していることは、「体育は何を学習する科目なのか？」ということである。このことを学生に問うと、多くが「運動の技能」と回答するが、「本当にそうなのか？」という視点を持たせること、つまり、どのようにすれば受講生の概念・固定観念を崩せるかを日々模索している。紙幅の都合上、詳細は割愛するが、体育は「それぞれのスポーツが持つ『固有なおもしろい世界』を学習する科目」であり、運動技術の習得はスポーツの『固有なおもしろい世界』に浸るための手段の一つに過ぎないのだということを受講生に気づかせることが、教師となった際に体育の授業において、学習指導要領に掲げられている『豊かなスポーツライフを

現するための資質・能力』を子どもたちに身につけさせることに繋がるのだと考えている。「概念・固定観念崩し」のために、座学と実技との往還による授業の可能性についてさらに探究していきたい。

## 学生のまなざし

水島 葵さん（初等教育学科 2年）

私が「初等科教育法（体育）」の授業で特に印象に残っているのは、「競争とは何か」をテーマとした実技授業です。内容は、仲間と協力するリレーや、紅白玉のどちらが出るかを予想して走り出すゲーム（「運」の要素を加えた徒競争）など、体力差に関係なくみんなが「おもしろい」と感じることでできる運動です。児童の立場になって思いっきり身体を動かしたことにより、運動の「楽しさ（機能的特性）」を学習することが現在の体育では重要であると、身をもって感じることができました。

講義を聞くだけではなく、実際に身体を動かし、身を持って学ぶことのできるこの授業は、私にとってとても分かりやすく、深い学びを得ることができました。

北川 周さん（初等教育学科 2年）

この授業は、私が最初に想像していたような学習指導要領を確認しながら指導案を作成することを中心とした授業ではありませんでした。座学のみならず実技で体育やスポーツに触れる体験を改めてすることで、身をもって学校体育の在り方や子ども達が楽しいと思える体育の授業について考えることができました。

その中で私が一番おもしろいと感じたのは『原始型ボールゲーム』です。ルールがほぼ無く、もみくちゃになりがちだった試合が、自分たちで工夫してルールを作り、それを守ることで1つの競技として成立していくのを体感しました。この体験のおかげで、私が実際にラグビーの模擬授業を行うにあたって、子ども達が楽しく自由に動く中で、子ども自身が創意工夫を見出すような授業を構想することができました。この授業で得た経験を他の科目や実習等に活かしていきたいです。



# データは語る

—教育開発推進機構とFDのこれまでとこれから—

教育開発推進機構 戸村 理・小濱 歩

教育開発推進機構（以下、機構）は、平成30年度に設置10年目を迎えました。機構ではこれを契機に、各種の取組について点検・検証を行っています。今回の「データは語る」では、その点検のうち、FDの取組の点検・検証結果の一部をお知らせします。なお、今回の誌面では、数量的データだけでなく、テキストデータを中心とした構成となっていることを予めお断りしておきます。

## 機構が提供するFDプログラム

表1は、平成30年度現在、機構が提供しているFDプログラムを一覧にしたものです。表中の「関わり方」とあるのは、プログラムに対する機構教員の関わり方を意味しています。「内部直接型」とは、機構の内部、つまり機構所属の教員が、FDの講師役やメンターを直接担当することを意味しており、「外部型」とは、学外から有識者を招いて講演や演習を行ってもらうことを意味します。そして「間接型」とは、機構教員はFDの直接的な実施者ではないものの、学部や教員グループによるFDの取組に対して、その審査や予算措置を所管しつつ、中間・最終報告書の提出や成果報告会への参加を促すといった形で支援の主体となること、加えて、要請に応じてプログラムへの助言等の業務を行うことを意味しています。

このように、機構が提供するFDプログラムは多岐にわたりますが、今回は紙幅の都合から、FDワークショップとFD推進助成事業を中心に振り返ってみたいと思います。

## FDワークショップ

FDワークショップは、大学・高等教育におけるさまざまなトピックについて、本学でのニーズを考慮した上で、毎回1つのトピックに注目し、演習・実践形式でその情報共有・内容把握を目指す研修プログラムです。

表1 機構が提供するFDプログラムの一覧

関わり方	プログラム名	開催頻度・担当者
内部直接型	新任教員研修 FDワークショップ	年3～4回実施 年3回程度実施
外部型	FD講演会	年1回実施
間接型	FD推進助成事業 ・学部FD ・グループFD	学部ごとに実施 教職員有志で実施

表2に示したように、FDワークショップは平成22年度に開始し、現在までに計28回実施されました。当初の2年間こそ実施回数の少なさが目立ちますが、平成24年度からは年3～4回程度実施されるようになったことがわかります。また、先に、FDワークショップは機構教員が直接担当する「内部直接型」であるとしたが、年間を通じて全ての回について「内部直接型」と言える体制を整えたのは、平成28年度以降であることも見て取れます。

続いて、タイトル（内容）を確認してみましょう。平成24年度から一貫して「シラバスと授業の到達目標の書き方」が開催されています。シラバスの作成は、学士課程教育の質保証上、最も基本的な事項であり、欠かすことのできない内容として、特に新任教員の方々を中心に受講していただいています。

さらに、完全に「内部直接型」となった平成28年度以降になると、ワークショップの内容が教育工学や高等教育評価論、教育心理学等の学術的知見に基づいた具体的な教授法を実施する段階へと移行したことがわかります。たとえば、平成28年度の「アクティブラーニングとジグソー法」や、平成29年度の「やさしい反転授業教材投影法」「大学の成績評価」、平成30年の「インストラクショナルデザイン①②」などがそれに該当します。

こうしてみると、当初、外部の力を借りてスタートしたFDワークショップでしたが、次第に機構教員のみで

表2 FDワークショップの年次別一覧

年度	担当	タイトル(内容)
平22	外部	「授業設計論1」(シラバスと授業)
平23	内部	「授業設計論1」(シラバスと授業)
平23	外部	「教育方法論演習2」(良い授業のための留意点-話し言葉に着目して)
平24	外部	「國學院大學校史」
平24	内部	「教育評価論演習-学習達成評価-」
平24	外部	「シラバスと授業の到達目標の書き方」
平24	内部	「良い授業のための留意点(非言語、視聴覚情報の応用)」
平25	外部	「國學院大學校史」
平25	内部	「日本の高等教育をめぐる情勢と國學院大學」
平25	外部	「シラバスと授業の到達目標の書き方」
平25	内部	「聴き手に求められる力」
平26	外部	「ルーブリック評価の実際-学習達成度評価の方法-」
平26	内部	「シラバスと授業の到達目標の書き方」
平26	内部	「良い授業のための留意点(話し言葉に着目して)-図形並べ-」
平27	外部	「ルーブリック評価の実際-学習達成度評価の方法-」
平27	内部	「シラバスと授業の到達目標の書き方」
平27	内部	「良い授業のための留意点(非言語、視聴覚情報の応用)」
平28	内部	「マイクロティーチング」
平28	内部	「シラバスと授業の到達目標の書き方」
平28	内部	「アクティブラーニングとジグソー法」
平29	内部	「マイクロティーチング」
平29	内部	「シラバスと授業の到達目標の書き方」
平29	内部	「大学の成績評価」
平29	内部	「やさしい反転授業教材撮影法」
平30	内部	「インストラクショナルデザイン①」
平30	内部	「大学の成績評価」
平30	内部	「シラバスと授業の到達目標の書き方」
平30	内部	「インストラクショナルデザイン②」

の実施が可能となり、内容的にも実践志向に加えて、最新の学術的知見を考慮したプログラムを重視する方向に変化してきたとすることができるのではないのでしょうか。

## FD推進助成事業

FD推進助成事業は、学部FD推進事業(平成24年度～)とグループFD推進事業(平成29年度～)に分かれます。ともに単年度ベースでFD支援のための予算を措置するプログラムですが、前者は学部単位で実施されるFDを支援対象とするのに対し、後者は学部横断型で実施されるFDを対象とする点で違いがあります。

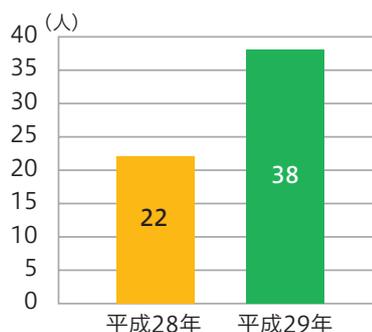
学部FD推進事業は、平成24～30年度の7年間にわたって、どの学部も一度も途切れることなく事業申請を行っています。各学部のプロジェクト内容の詳細は機構が毎年度刊行する『成果報告集』に委ねますが、どの学部も、カリキュラム改善に資するプログラムであることは共通します。ただし、カリキュラム改善を検討するに際し、導入教育ないしは初年次教育などの特定の教育段階のあり方を模索する場合や、アンケート調査等によって実効性を確認する場合など、各学部によってその取り

組み方には大きな違いが見られました。

これらの取組み成果は、極めて重要な「知見」であるものの、平成27年度以前は、それらを広く全学で共有する場が設けられていませんでした。そこで、平成28年度から年度末に学部FD及びグループFD担当者等による「成果報告会」を開催し、共有の場としています。図1は、過去2年間に開催された報告会の参加者数です。初年度は22人の参加でしたが、次年度は38名が参加し、約1.7倍の伸びとなりました。とはいえ、まだまだ参加者数は少なく、参加者増のための有効な施策が求められます。

また、平成30年度に入ってから、学部FD実施に際して、一部の学部から助言等のコンサルティングの依頼を受けるようになりました。このような依頼に対して有効に支援を行っていけるよう、機構は学部等とのコミュニケーションを活性化させるとともに、有為な情報を発信し続ける必要があると言えます。

図1 成果報告会の参加者数



## 機構のFDのこれから

以上、FDワークショップとFD推進助成事業を取り上げて、機構10年間の取組に対する点検・検証結果の一部を紹介してきました。表1に掲げた各FDプログラムに参加した教員にアンケートを実施していますが、その回答を見ると、概ねそれなりの有用性は認識されているものの、「参加者が少なく残念だった」という意見が多く寄せられています。機構では、より多くの先生方に資するような興味深いプログラムを検討・開発することで、参加者増を実現し、本学学士課程教育の改善に努めたいと考えています。

\*点検・検証に関する詳細は、近日刊行『國學院大學教育開発推進機構紀要』第10号所収の戸村理・小濱歩「学術誌上のFD研究の動向からみた機関レベルでのFD実践の批判的検討—『大学教育学会誌』と國學院大學教育開発推進機構に焦点をあてて—」を御覧頂ければ幸いです。

# 名著探訪

— 高等教育、この1冊 — (第11回)

本機構の教員が、自身の日々の教育活動や高等教育研究を進める上で役に立ったもの、これは読んでおいた方がいいと思うものなど、その琴線に触れた1冊を紹介するコーナーです。

## ● 大学を知るために



編者委員：兒玉善仁・岡山茂・川島啓二・木戸裕・  
赤羽良一・斎藤泰雄・館昭・立川明編『大学事典』  
(平凡社、2018年)

本欄にふさわしい書籍であると言いたいところであるが、前書きを読むと、そう単純な事典ではないことを知らされる。「はじめに」には、「本事典は、高等教育の側から大学をとらえるのではなく、大学の側から高等教育も視野に入れるという観点をとっている」とある。その追記にも、編集代表者が提唱し、編集員が共有した「大学概念」に関して、「本事典は『高等教育』事典ではなく、あくまで『大学』事典として位置づける」と筆頭に挙げられている。これは、「大学こそが高等教育機関の中軸であり、最も長い歴史と広い国際性を持つ機関であって、他の高等教育機関に多大な影響を与えてきたからである」(「はじめに」)という、大学という存在への自負によるものである。

本書は、テーマ編と項目編に分かれる。四つに分かれるテーマ編はのっけから「大学が直面する課題」とされており、現在の日本における大学関係者の危機感を物語っている。言うまでもなく、課題は山積みである。テーマ編は、以下「大学と社会の関係」「大学の組織と機能」「世界の大学—歴史と現状—」と続く。項目編は、「世界と日本の大学の歴史と現状、社会との関係、組織と機能にかかわる概念や用語、固有名詞等のほか、海外と国内の個別大学」(「凡例」)を立てている。国内の個別大学の項目数が今後どの程度削減されるのか、本書を手にした大学関係者は誰しもが気になるところではないだろうか。個別大学の項目は毎年改訂が必要になるな、と余計な心配をするのであった。

さて、気の向くままに項目を拾い読みしていると、大学というものは単に高等教育機関の中軸であるだけではないことに改めて気づかされる。大学という機関、組織の複雑さや、大学が様々な要素の集合体であることが理解できる。それは執筆者の構成にも表れており、高等教育の専門家に限られているわけではない。項目によっては執筆者の主張が明らかで、思わず何者なのか調べてしまったものもある。面白く読める項目もある。まだまだ項目が立てられそうだが、事典の構成には編集者の企図があるので、それを考えてみたいものである。(佐川)

# 教育開発推進機構彙報

(平成30年7月1日～12月31日)

※肩書きは等は当時のもの

## 行事

### ○催事

- 8月6～10日：教員免許状更新講習 於渋谷キャンパス（中・高）・たまプラーザキャンパス（幼・小・中・高）
- 11月17日：教育開発推進機構講演会「旅で身につけたコミュニケーション」(講師：ジャーナリスト 丸山ゴンザレス氏)
- 11月28日：平成30年度FD講演会「学士課程教育の質保証とIR」(講師：日下田岳史大正大学専任講師)
- 12月1日：院友若手教員・教員採用試験合格者交流会

### ○学生オリエンテーション・講習会・試験実施等

- 7月4・11日：アカデミック・スキルズ講座（たまプラーザ）
- 7月4日：中国語検定3級講習会
- 7月4日：第3回教員就職ガイダンス（3年生）
- 7月7日：TOEIC® IPテスト
- 7月11・14日：教員免許状一括申請登録会（1次）
- 7月13日：ボランティアフェア2018
- 7月17・18・19日：新潟コメ作りワークショップ（稲刈り）説明会
- 7月15日～8月15日：教員採用試験二次対策指導会
- 8月7日：供花神饌ワークショップ
- 8月24日～9月20日：教員採用試験対策夏期集中講習会
- 9月4日：TOEIC® IPテスト
- 9月11日：TOEIC® IPテスト
- 9月19・20日：新潟コメ作りワークショップ（稲刈り）
- 9月26日：第4回教員就職ガイダンス（3年生）
- 9月29日：後期教員就職ガイダンス（2年生）
- 10～11月：TOEIC® L&R対策講座（初級・中級各8回）
- 10～12月：English Lounge
- 10月3日：教職履修カルテ説明会
- 10月3日～12月12日：教員就職支援 後期教職総合ゼミナール
- 10月6日～12月8日：教員就職支援 専門教科ゼミナール
- 10月11日～12月7日：教員就職支援 後期教育小論文講習会
- 10月17日：教員求人登録説明会（4年生・大学院生）
- 10月23・25日：アカデミック・スキルズ講座（たまプラーザ）
- 10月24日～12月21日：首都圏教育委員会教員採用試験学内説明会（9自治体）
- 10月27日：TOEIC® IPテスト
- 10月31日：國學院栃木教育実習事前ガイダンス

11～12月：The Japan News Presents「英字新聞を活用した日本文化発信」(全5回)

- 11月2日：第5回教員就職ガイダンス（3年生）
- 11月2日：第1回学内教員採用模試 於たまプラーザキャンパス
- 11月16日：高等学校授業見学演習 於都立小山台高等学校（教員採用試験合格者）
- 11月21日：教員採用試験合格者報告会・相談会
- 11月29日：ボランティアフェア2018冬
- 12月1日：ノートテイクフェア
- 12月1日：TOEIC® IPテスト
- 12月1日：新潟コメ作りワークショップ（奉納） 於春日大社（東海林）
- 12月4日：新潟コメ作りワークショップ（昼食会）
- 12月5・8日：教員免許状一括申請登録会（2次）
- 12月11日：アカデミック・スキルズ講座動画配信
- 12月15日：教員就職支援 志望県別学習相談会
- 12月25日：TOEIC® IPテスト（1年生のみ）
- 12月17～21日：アカデミック・スキルズ講座（渋谷・たまプラーザ）
- 12月19日：中国語各種検定講習会

## 学生スタッフ研修会・打ち合わせ会等

- 7月11日：SA前期報告会
- 7月18日：ノートテイク研修会
- 8月3日：ノートテイク前期報告会
- 8月24日：たまプラーザノートテイク研修会
- 10月20日：ホームカミングデーSA・NT OB交流会
- 11月21日：SA後期中間報告会
- 11月28日：ノートテイクスキルアップ研修会
- 12月12・15日：ノートテイク研修会

## FD活動、教育支援

- 7月21日：平成30年度 第2回FDワークショップ（講師：柴崎）
- 12月8日：平成30年度 第3回新任教員研修（講師：小濱）、第3回FDワークショップ（講師：戸村）

## 出張等

- 7月4日：2018年度 第1回FD研修会「著作権法改正が大学教育に与える影響」 於神奈川大学横浜キャンパス（小濱）

- 7月13日：国立大学協会政策研究所運営委員会・高等教育に関する基礎データ等の調査研究グループ合同研究会（第2回）於学術総合センター（委員：戸村）
- 9月3日：都内私立大学教職課程事務担当者懇談会第3回幹事会 於昭和女子大学（高橋）
- 9月4～5日：第18回山形大学FD合宿セミナー 於山形大学（佐藤）
- 9月15日：勅祭石清水祭参列（鈴木(崇)）
- 10月2日：清泉女子大学ウェルネスセンターヒアリング(佐藤)
- 10月10日：国立大学協会高等教育に関する基礎データ等の調査研究グループ(第7回) 於学術総合センター(委員：戸村)
- 10月20日：都内私立大学教職課程事務担当者懇談会総会 於昭和女子大学（小林）
- 11月7日：「東京2020サポートプログラム～アスリートの家族・友人の大会経験の支援～」説明会 於オリンピック組織委員会（佐藤）
- 11月13日：千葉大学アカデミック・リンク・センター「米国高等教育におけるアカデミック・アドバイジング」千葉大学（佐藤）
- 11月16日：宮城県教育庁・仙台市教育委員会訪問（坂入）
- 11月17日：東京大学バリアフリー支援室「15年の歩みと今後の課題ーインクルーシブ社会における包括的支援×大学」於東京大学（佐藤）
- 11月17日：全国私立大学教職課程研究連絡協議会 於東北学院大学（坂入）
- 11月18日：関東地区私立大学教職課程研究連絡協議会教育実習のハラスメント防止部会 於明治学院大学白金校舎（高橋）
- 11月22日：文京学院大学訪問 於文京学院大学（戸村）
- 12月13日：青山学院大学障がい学生支援センターヒアリング（東海林・鈴木(崇)・佐藤）
- 12月16日：関東地区私立大学教職課程研究連絡協議会第2回研究懇話会 於東洋学園大学本郷キャンパス（高橋）
- 12月18日：都内私立大学教職課程事務担当者懇談会新旧幹事校引継ぎ会 於國學院大學（小林・高橋）
- 12月22日：キャンパスソーシャルワークネットワーク全国研修会 於淑徳大学（佐藤）

12月22日：明治大学・関西大学合同IRシンポジウム「私立大学におけるIRの可能性」於関西大学梅田キャンパス（小濱）

#### 講師・研究発表・情報提供

- 7月26日：國學院大學大学職員基礎知識習得研修（小濱・佐藤）
- 9月5日：慶應義塾職員研修「事実と数字（Facts and Figures）から考える義塾のグローバル化」歴史と比較からみた慶應義塾の経営 於慶應義塾大学（講師：戸村）
- 9月19～20日：國學院大學北海道短期大学部FD研修会（講師：佐藤）
- 11月12日：國學院大學大学職員基礎知識習得研修（小濱・佐藤）
- 12月1・2日：大学教育学会2018年度課題研究集会「現代日本の大学団体における研究・研修の在り方に関する考察ー国立大学協会の活動を事例にー」（ポスター発表：戸村）
- 12月5日：第4回早稲田大学大学史研究セミナー「歴史のなかの私立大学経営と早稲田」於早稲田大学（講師：戸村）
- 12月14日：國學院大學大学職員基礎知識習得研修（小濱）
- 12月15日：青山学院大学障がい学生支援センター職員によるノートテイカー研修会見学

#### 情報発信

- ・教育開発推進機構ウェブサイトよりセミナー等情報発信（随時）
- ・高等教育TOPICS配信（授業期間中）

#### 刊行物

- 9月：『教育開発ニュース』Vol.18
- 9月：平成30（2018）年度前期学生による授業評価アンケートリーフレット（教育開発センター）
- 12月：『平成29年度FD推進助成（甲・乙）事業成果報告書』
- 12月：『平成29（2017）年度学生による授業評価アンケート分析報告書』

そっ たく どう じ  
啖 啖 同時

#### — 編集後記 —

教育開発推進機構は10年目を迎え、ニューズレターも19冊目となりました。正直なところ、よく続いたものだと感心しています（この文脈では「機構が」ではなく、「ニューズレターが」です。実際のところは、「機構もニューズレターも」ですけれども）。2年目からは年2回刊行となって現在に至りますが、年1回にしようという提案もありました。年2回では続かないのではないかと危惧されたのです。頁数の増減はありますが、号数を重ねるうちに連載も増え、年2回の発行も定着しました。次の10年がどうなるのかはわかりませんが、毎号のニューズレターが、ささやかながらも何らかの益になることを願っています。（佐川）